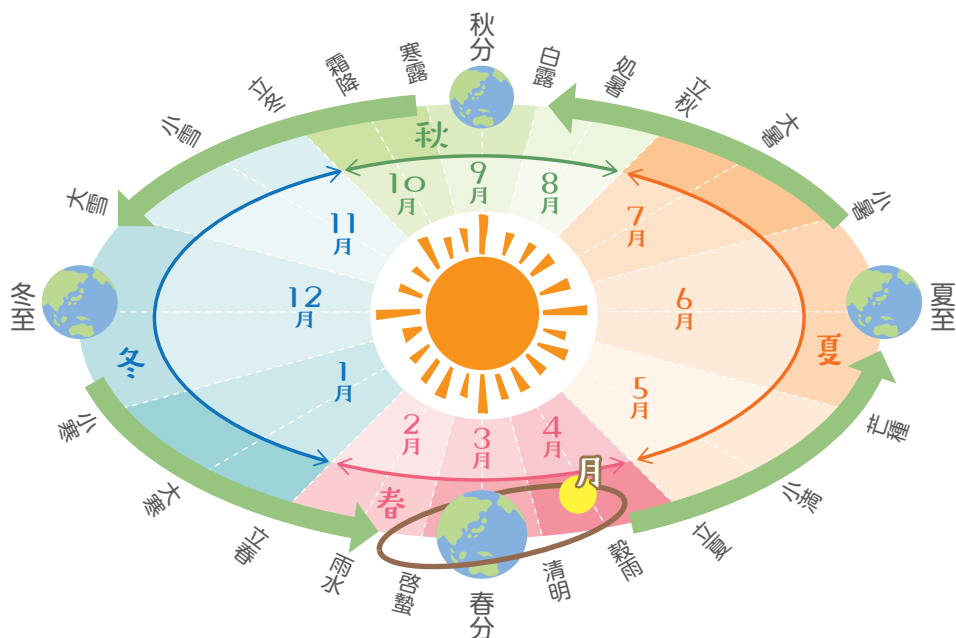


暦の中のマークとことば



月 齢

月は約 29.5 日で新月から満月、そしてまた新月へと満ち欠けを繰り返しています。

新月から経過した日数が月齢となります。

○ … 新 月 / 月齢 0.0

別名：朔(さく)

月と太陽が同じ方向にあり、地球から月が見えない状態。

月の満ち欠けをもとにした「太陰暦」では、新月を月始めの日としているので、“始まり”という意味の「朔(さく・ついたち)」の別名があります。

● … 満 月 / 月齢およそ 14.8

別名：望(ぼう)・望月(もちつき)

月と太陽が反対方向にあり、輝いている面が地球を向いた状態。

◐ … 上弦の月 / 月齢およそ 6.6

別名：弓張月(ゆみはりつき)

月の右半分が明るくなった状態で、半月とも呼ばれます。

◑ … 下弦の月 / 月齢およそ 22.8

別名：二十三日月(にじゅうさんやつき)

月の左半分に光が当たった状態。

干 支・六十干支 (3くじっかんい)

干支(えと)は、十干(じっかん)「甲・乙・丙・丁・戊・己・庚・辛・壬・癸」と十二支(じゅうにし)「子・丑・寅・卯・辰・巳・午・未・申・酉・戌・亥」の組み合わせです。

● 六十干支

干支の組み合わせ(十干と十二支の組み合わせ)は60通りあり、六十干支と呼びます。これが一巡すると還暦となります。

● 十 干

十干はもともと、甲・乙・丙…と、日を順に10日のまとまりで数えるための呼び名(符号)でした。10日ごとに、「一句(いちじゅん)」と呼び、3つの旬(上旬、中旬、下旬)で1ヶ月になるため、広く使われていました。

古代中国では、万物はすべて「陰」と「陽」の2つの要素に分けられるとする「陰陽説(いんようせつ)」と、すべて「木」、「火」、「土」、「金」、「水」の5つの要素からなるとする「五行説(ごぎょうせつ)」という思想がありました。これらを組み合わせて「陰陽五行説」といい、やがて陰陽五行説を「十干」に当てはめるようになりました。また、日本では、この「陰」と「陽」を「兄(えい)」と「弟(と)」に見たて、「兄弟(えい)」と呼ぶようになりました。

● 十二支

古代中国では、「年」を数えるとき木星の動きをもとにしていました。木星は12年で公転(太陽を1周)するので、人々は毎年木星の位置を示すために天を12に分けました。12に分けられた天にはそれぞれ子から亥までの字(中国で数を表す数詞)をあてはめました。

その十二支は、字が読めない人でも覚えやすいよう動物に替えられて広まり、やがて日本に伝わりました。日本では十二支は年だけでなく、月や時間にもあてはめられ広く使われました。

和 風 月 名 (わふうげつめい)

旧暦では、和風月名と呼ばれる月の和風の呼び名を使用していました。

和風月名は旧暦の季節や行事に合わせたもので、現在の暦でも使用されることがありますが、現在の季節感とは1〜2ヶ月ほどのずれがあります。

1 月	睦 月	むつき	正月に親類一同が集まる、睦び(親しくする)の月。 「生月(うむつき)」が転じたという説もある。
2 月	如 月	きさらぎ	衣更着(きさらぎ)とも言う。まだ寒さが残っていて、衣を重ね着する(更に着る)月。
3 月	弥 生	やよい	木草弥生い茂る(きくさいやおいしげる、草木が生い茂る)月。 暖かな陽気にすべての草木がいよいよ茂るという意味の「弥生(いやおい)」がつまって「弥生(やよい)」になったといわれる。
4 月	卯 月	うづき	卯(うづき)の花(耐寒性が強く庭木や生け垣向きの低木で、花は白やピンク。 本来の開花期は5月中頃から)の月。 田植えをするから「植月(うづき)」という説もある。

5 月	皐 月	さつき	早月(さつき)とも言う。早苗(さなえ)を植える月。 「皐」という字には水田という意味がある。
6 月	水無月	みなづき みなつき	水の月(“無”は“の”を意味する)で、田に水を引くという意の月。また、 旧暦の5月は梅雨明け後で夏の盛りであることから、水が涸れて無 くなる月であるという説もある。
7 月	文 月	ふみづき ふづき	稲の穂が実る月(穂含月:ほふみづき)。 短冊に歌や字を書く七夕の行事があることから「文披月(ふみひろげ づき)」が転じたという説もある。
8 月	葉 月	はづき はつき	木々の葉落ち月(はおちづき)。旧暦では7月から秋となるため、秋真っ 盛りの意。
9 月	長 月	ながつき ながづき	夜長月(よながづき)。 秋の長雨の「長雨月(ながめづき)」、稲穂が実る「穂長月(ほながづき)」 から転じたという説もある。
10 月	神無月	かなづき	神の月(“無”は“の”を意味する)。 神々が集まる出雲の国では「神在月(かみありつき)」と言う。また、全 国の神々が出雲大社に集まり、各地の神々が留守になる月という説 などもある。
11 月	霜 月	しもつき	霜の降る月。「霜降月(しもふりつき)」の略。
12 月	師 走	しわす	12月は僧(師)を迎えてお経を読んでもらう月だったため、師が馳せ る月という意の「師馳す」が転訛し、走るという字が当てられるよう になったといわれる。

五節供 (ごせっく)

古代中国では、3月3日や5月5日のように奇数(陽)の重なる日は、めでたい反面、陰に転じやすいとされ、邪気を払う行事が行われていました。この中国の暦法と風習が日本に伝わると、日本古来の儀礼や祭礼などと結びつき、宮中で邪気を祓う行事が催されるようになりました。神に供えものをして無病息災を祈ることから「節供」といい、「節句」の字をあてることもあります。

五節供には、3月3日や5月5日のように奇数の重なる日が選ばれていますが、1月1日(元日)は別格とされ、7日の人日(じんじつ)が五節供の中に取り入れられています。

また、邪気を祓うために、旬の植物から生命力をもらうということで、それぞれの節供には植物が深くかかわっています。

人日(じんじつ)の節供 別名:七草の節供	1 月 7 日	春の七草を入れた七草粥で邪気を祓う。 せり・なすな／ごぎょう・はこべら／ほとけのざ／すずな・すずしろ
上巳(じょうし)の節供 別名:桃の節供	3 月 3 日	この頃開花期を迎える桃の木は、邪気を祓う神聖な木と考えられていた。

端午(たんご)の節供 別名:菖蒲の節供	5月5日	この時期に盛りを迎える香り高い菖蒲や蓬が邪気を祓うとされ、菖蒲酒を飲んだり、菖蒲湯に浸かって邪気祓いをした。
七夕(しちせき)の節供 別名:笹の節供・七夕	7月7日	江戸時代、寺子屋が増え手習いごとをする人も増えたので、星に上達を願ったり、笹竹に短冊をつるして願い事をするようになった。
重陽(ちょうよう)の節供 別名:菊の節供	9月9日	菊は長寿をもたらすおめでたい花であり、強い香りで邪気を祓うとされてきた。

年中行事

- 鏡 開 き…松の内が過ぎたら鏡餅を下げて食べ、年神様をお送りします。松の内を1月7日までとする地方では11日に、15日とする地方では15日に鏡開きを行う場合が多い。
- 十 五 夜…旧暦の8月15日。月見団子、旬の食材、季節の草花、ススキなど供える習慣があります。
- 煤 払 い…12月13日は婚礼以外は万事に大吉とされる「鬼宿日」にあたることから、年神様を迎える準備を始めるのにふさわしい日とされ、「正月事始めの日」としてこの日から掃除などして正月の準備にとりかかります。
- しめ縄や正月飾りはこの日以降28日までか、30日に飾るとよいとされています。

二十四節気 (にじゅうしせっき)

二十四節気とは、太陽の黄道(こうどう)を15度ごとに24等分し、約15日ごとに分けた季節のこと。1年を春夏秋冬の4つの季節に分け、さらにそれぞれを6つに分けたもので、「節気(または節)」と「中気(または中)」が交互にあります。

太陰太陽暦(旧暦)の閏月(うるうづき・じゅんげつ)を設ける基準となっており、中気のない月を閏月としていました。二十四節気は、その年によって1日程度前後することがあります。

本来の二十四節気は中国の中原を中心とした地域の気候をもとに名付けられており、日本で体感する気候とは季節感が合わない名称や時期があります。

季節	二十四節気名		月	新暦の日付	意 味
春	立 春	りっしゅん	1月	節 2月 4日頃	最初の節気。暦の上で春の始まり。
	雨 水	うすい		中 2月19日頃	雪が雨に変わり、雪解け水が流れ出す時期。
	啓 蟄	けいちつ	2月	節 3月 5日頃	冬眠から目覚めた虫が顔を出す時期。
	春 分	しゅんぶん		中 3月21日頃	昼夜の長さが同じになる。今後は日が延び始める。
	清 明	せいめい	3月	節 4月 5日頃	万物が清らかで生き生きとする時期。
	穀 雨	こくう		中 4月20日頃	春の雨で農作物が潤うことから、種まきに適した時期。

夏	立夏	りっか	4	節	5月 5日頃	暦の上で夏の始まり。
	小満	しょうまん	4	中	5月21日頃	草木が成長し、麦の穂も実る時期。
	芒種	ぼうしゅ	5	節	6月 6日頃	「芒」は稲の穂先。穀物の種まきに適した時期。
	夏至	げし	5	中	6月21日頃	太陽が1年で最も高くのぼり、昼が最も長い日。
	小暑	しょうしょ	6	節	7月 7日頃	だんだん暑さが増してくるという意味。
	大暑	たいしょ	6	中	7月23日頃	1年で最も暑くなる時期。
秋	立秋	りっしゅう	7	節	8月 8日頃	暦の上で秋の始まり。これ以降の暑さを「残暑」と呼ぶ。
	処暑	しょしょ	7	中	8月23日頃	暑さが収まる頃という意味。
	白露	はくろ	8	節	9月 8日頃	草花に朝露が付き始める時期。
	秋分	しゅうぶん	8	中	9月23日頃	昼夜の長さが同じになる日。秋の夜長に向かう。
	寒露	かんろ	9	節	10月 8日頃	草木に冷たい露が降りる時期。
	霜降	そうこう	9	中	10月24日頃	早朝に霜が降り始める時期。
冬	立冬	りっとう	10	節	11月 7日頃	暦の上で冬の始まり。
	小雪	しょうせつ	10	中	11月22日頃	山に初雪が舞い始める時期。冬の入り口。
	大雪	たいせつ	11	節	12月 7日頃	平地に雪が積もる時期。
	冬至	とうじ	11	中	12月21日頃	1年で最も夜が長い日。
	小寒	しょうかん	12	節	1月 5日頃	寒さが厳しくなる時期。寒の入り。
	大寒	たいかん	12	中	1月21日頃	寒さが最も厳しい時期。最後の節気。

雑 節 (ざっせつ)

雑節とは、季節の移り変りをより適確に掴むために設けられた特別な暦日のことで、二十四節気・五節句のように中国から伝わったものではなく、日本人の生活文化から生まれた日本独自のものです。

貴族や武家の儀式ではなく、主に農作業と照らし合わせた季節の目安となっており、日本の気候風土に合わせて培われてきました。

社 日…春分、秋分に最も近い戊(つちのえ)の日で、1年に2回あります。春には豊年を祈り、秋には成熟を祝う行事をそれぞれ行い、土地の守護神に感謝します。春の社日は「春社(しゅんしゃ、はるしゃ)」、秋の社日は「秋社(しゅうしゃ、あきしゃ)」とも言います。

節 分…本来、節分とは季節の節目である「立春、立夏、立秋、立冬の前日」のことなので、年に4回ありましたが、現在は立春の前日を指すようになりました。

彼岸…春分と秋分の前後の3日ずつの計7日のこと。初日を彼岸の入り、当日を中日(ちゅうにち)、終日を明けと呼びます。

土 用…立春、立夏、立秋、立冬の前18日間。この期間は、土公神(どくじん・どくしん・どこうじん)が支配するといわれ、土を動かすことは忌むべきこととされました。

八十八夜…立春から数えて88日目を行い、種まきの目安の日。

入 梅…二十四節気のうち、芒種の後の壬(みずのえ)の日。梅雨に入る目安となる頃。

半 夏 生…夏至から数えて11日目の7月2日頃から七夕頃までの5日間をいいます。田植えは半夏生に入る前に終わらせるものとされ、この頃から梅雨が明けます。

二 百 十 日…立春から数えて210日目の日で、毎年9月1日頃にあたります。この頃は稲が開花する重要な時期ですが、農作物に甚大な影響を与える台風に見舞われることも多いので、厄日として戒めるようになりました。

二百二十日…立春から数えて220日目の日。二百十日と同じ意味を持ちます。

初 午…初午(はつうま)は2月最初の午の日。稲荷神のお祭り。旧暦2月の初午の日(今の3月)はちょうど稲作を始める時期だったため農耕の神様を祭るようになりました。稲荷の名は「稻生り」から来たともいわれています。

大 祓…大祓(おおはらえ、おおはらい)は、日本の神道儀式の祓の1つ。毎年新暦6月30日と12月31日に行われます。民間の場合、6月のものは「夏越の祓」(なごしのはらえ)、12月のものは「年越の祓」(としこしのはらえ)と呼び分けられます。

六 曜 (ろくよう)

六曜(ろくよう)は14世紀ごろに中国から日本に伝えられましたが、広く行われるようになったのは幕末以降のことです。時代とともにその名称や順序も変遷していて、現在は、先勝、友引、先負、仏滅、大安、赤口となっています。旧暦の1月、7月の1日(朔日)に先勝を当て、以後順に担当していきます。意味の解釈は様々で、どれが正しいという基準はありません。

六 曜		基 準 日 (旧暦)	意 味
先 勝	せんしょう・せんかち さがち・さきかち	1 月、7 月の 1 日	「先(さき)んずれば即(すなわ)ち勝つ」。急ぐことは吉。万事に急ぐことが良いとされ、「午前中は吉、午後2時より6時までは凶」。
友 引	ともびき	2 月、8 月の 1 日	友を引く。祝い事は良いが葬式などの凶事を忌む。朝夕は吉、正午は凶など。
先 負	せんぶ・せんぶ せんまけ・さきまけ	3 月、9 月の 1 日	「先んずれば即ち負ける」。何事も控えめに平静を保つ日。午前は凶、午後は吉。
仏 滅	ぶつめつ	4 月、10 月の 1 日	「仏も滅するような大凶日」。万事凶だが、葬式や法事は良いとされる。
大 安	たいあん・だいあん	5 月、11 月の 1 日	「大いに安し」。万事大吉。特に婚礼に良いとされる。
赤 口	しゃっこう・しゃっく じゃっく・じゃっこう せきぐち	6 月、12 月の 1 日	陰陽道の「赤舌日(しゃくぜつにち)」という凶日に由来。「赤」という字が付くため、火の元、刃物に要注意。ただし法事はよし、正午だけは吉。

参考： 国立国会図書館、日本の暦、<https://www.ndl.go.jp/koyomi/> 暮らし歳時記、<https://www.i-nekko.jp/>
国立天文台、暦計算室、<https://eco.mtk.nao.ac.jp/koyomi/>